

会 議 録

会議の名称		平成30年度第5回つくば市総合教育会議		
開催日時		平成30年9月27日(木)11時00分から12時40分まで		
開催場所		つくば市役所2階202、203会議室		
事務局(担当課)		総務部総務課		
出席者	委員	五十嵐市長、門脇教育長、鈴木教育委員、小野村教育委員、柳瀬教育委員、倉田教育委員		
	講師	小林りん氏(インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢代表理事)		
	事務局	毛塚副市長 《総務部》藤後部長、吉沼次長 《総務課》中泉課長、奥沢課長補佐、荒澤課長補佐、高野係長、東泉主査、渡邊主任、鈴木主任 《教育局》森田局長、大久保次長 《教育総務課》貝塚課長、吉沼課長補佐、笹本課長補佐、宇津野係長、青木係長		
公開・非公開の別		<input checked="" type="checkbox"/> 公開 <input type="checkbox"/> 非公開 <input type="checkbox"/> 一部公開	傍聴者数	18名
非公開の場合はその理由		-		
議題		(1) 次世代を担う若者たちのために (2) 講演を受けてのディスカッション		
会議録署名人			確定年月日	平成 年 月 日
会議次	1 開会 2 市長挨拶 3 講演 講師：小林りん氏 (インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢代表理事)			

様式第1号

第	講演題目：次世代を担う若者たちのために ～諸外国におけるテクノロジー活用現況について～
4	講演を受けてのディスカッション
5	閉会

<審議内容>

事務局：ただいまから平成30年度第5回つくば市総合教育会議を開催します。

開会に当たり、市長の五十嵐から挨拶申し上げます。

市長：本日も御出席ありがとうございます。今までいろいろな議論を積み重ね、前はイエナプランの中川さんともディスカッションしましたが、本日が5回目となります。1回目会議でお話していましたが、日本のリーダーが集まる会合に行った時に、自分の子どもたちの教育の話になり、日本のリーダーたちがどこに自分の子どもを通わせているかというインターナショナルスクールという人が多かった。なぜそこまでインターナショナルスクールなのかと聞くと、日本の公教育に良い思い出がないというようなことを言われて、つくばでみんなの行かせたいような教育をするからと宣言してきました。実はその会場だったのが、小林りんさんの学校「インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢」でした。インターナショナルスクールとしてはもちろん、日本の教育界でも間違いなく一番注目されている方だと思っています。なかなか小林りんさんのお話を聞ける機会はないと思いますが、りんさんがどういう思いで教育をしてきたのか、なぜこの学校を作ったのか、どのようなアプローチをされているのかなど、私たちの検討している教育大綱、ビジョンに非常に大きな示唆を与えてもらえると思いますので、りんさんのお話をじっくり聞いて、いろいろと経験値のある皆さんとディスカッションして、何かりんさんにも持って帰っていただけるものもあれば、大変忙しいスケジュールを調整してきていた

だいた甲斐もあると思いますので、どうぞよろしくお願いします。

小林氏講演

- 1 学校の概要
- 2 チェンジメーカーを育てる3つの力
 - ・グローバル化の時代に：「多様性を活かす力」
 - ・50%の仕事がなくなる時代に：「問いを立てる力」
 - ・混迷の時代を生き抜くために：「困難に挑む力」
- 3 新たな取り組み

ディスカッション

事務局：貴重な御講演、ありがとうございました。それではこれからディスカッションに入ります。

市長：どうもありがとうございました。議論を深めるために、チェンジメーカーを育てる3つの力について、具体的に取り組んでいることをもう少しお話いただいて、ディスカッションに入る形でもよろしいですか。

小林氏：「多様性を活かす力」については、まず環境を作ることが大きいと思います。世界中から生徒を集め、奨学金によって表層的な多様性だけではなく、価値観やバックグラウンドなど本当の意味での多様性を作り出しています。もう一つは、授業の中で、どんな授業でも多様な見解を話すということに主眼を置いています。歴史はわかりやすいですが、イスラム教徒について話をすると日本の教科書では数行ですが、イスラム教徒は世界中にたくさんいて、教室内に世界最大のイスラム教国であるインドネシアの人が見るイスラム教と中東の人が見るイスラム教とソマリアの人が見るイスラム教では全然違う。そういったことを授業の中で意見を戦わせられる。ベトナム戦争についてもベトナムの子に言わせるとあの戦争があったからこそベトナムは平和だという話があるなど本当にいろいろな価値観が授業の中で議論されています。先生たちは「どう思う？」と違う価値観を出すことを推奨しています。理科でも染色体(X

と Y) を学んだ後に、染色体で遺伝する同じ病気を持ったカップルが結婚した場合に体外受精で染色体検査をすべきか否かといった生命倫理を議論する。イスラム教徒、仏教徒、医療関係者、患者の家族などの立場から見たら是なのか否なのかということを議論すると、理科でさえも倫理観の問題となり、価値観の多様性が大きいです。授業の外では、全寮制というの大きいです。9割の学びは寮の中で起きていると思います。例えばインドから来た子が、毎食ご飯を残すのですが、口に合わないかと聞くと、彼は今まで一日に一食しか食べたことがなかったと言いました。一日三食食べる胃ではなく、食べられない。僕はこんなにたくさんご飯をみたことがなかったと言っていました。そこにいた子どもたちはどんな授業やドキュメンタリーよりも切実に貧困や栄養失調に対して鮮烈な印象を持って帰ります。全寮制になるほど、四六時中そういったことが起こってくるので、多様性についてはこれが大きいと思います。

「問いを立てる力」については、マインドフルネスという自分と向き合う時間です。自分は何者なのか、何をしたいのか、何に情熱を持つのかというプラスのこともあれば、どんな時に自分は打ちひしがれるのか、怒りを持つのかなど自分の感情と向き合っていくということを中心に少人数でやっていきます。その上で、デザイン思考として、具体的なプロジェクトや発想にするかということをやっています。デザイン思考はスタンフォード大学で 20 年以上前に開発された手法で初年度から取り入れ、ニーズ把握をして、ニーズに対してどう解を与え、いくつもの解を作り直しながら進めています。生徒たちが主導で大小たくさんのプロジェクトが立ち上がっています。マインドフルネスもデザイン思考も座学 10%であり、90%は実践です。学校を 2 週間休んで生徒がゼロからプロジェクトを作るというプロジェクトウィークを毎年全員が必修でやっています。マインドフルネスとデザイン思考が結実してプロジェクトとしてできあがってきます。必ずしも全部のプロジェクトは成功しません。チームが仲違いしたり、空中分散したりするのもそれが現実なのでいいと思っています。

プロジェクトウィークでは、実は小さな成功を収めての成功体験か失敗しても死にはしないという失敗体験のどちらかを身につけてほしいと思っています。

「困難に挑む力」については、御紹介したプロジェクトウィークは困難の実践の場になっていますが、アウトドアも必修としています。アウトドアはルールがなく、天候がどんどん変わる、忘れ物をしたなど困難に当たる可能性が高いので、非常に力を入れています。

市長：ありがとうございます。素晴らしい教育をされています。それでは、各委員の背景が分かった方がコミュニケーションをとりやすいと思いますので、皆さん質問される前に、皆さんがどういうことをやられているかを一言言った上で、お話いただければと思います。教育長いかがですか。

教育長：私も1977年に一条校として群馬県に白根開善学校を建てる経験をしています。現行法でも新しいアイデアで学校を立ち上げれば十分やることに挑戦してきているので、小林さんの学校に共感を持って聞いていました。これからどういう日本社会にするためにどんな力をつけなければいけないと考えているか、目指している日本社会のビジョン又は未来像を教えてください。

小林氏：大切なキーワードはやはり「多様性」だと思います。多様な価値観が渦巻いてこそ、innovationやcreativityが起こってくると思うので、画一的な価値観ではなく、違う価値観から新しいアイデアが出てきた時にみんなで応援できる社会でないと日本の未来はないと思います。また「問いを立てる力」も重要だと申し上げましたが、そのためには、社会や周囲が何を求めているかではなく、一人一人が自分らしく生きられ、自分が本当に幸せな生き方を追求できる社会であってほしいと思います。最後に、「困難に立ち向かう力」を培うためにも、日本社会の減点主義を打破したいと思っています。リスクを取れと言いつつ、間違えたら左遷やクビで二度とカムバックできないというようでは、誰もリスクはとらないと思います。本当にこの社会を変えたいと思うので

あれば、失敗が減点につながらず、チャレンジした人が評価され、失敗してもまたチャンスが来るといふ社会通念が変わっていく必要があると思います。論点は変わりますが、こうした力を培う教育を、追求すれば追求するほど少人数教育になりますし、少人数教育はコストがかかりますので、その場合に機会均等をどう実現するかは大きな課題です。授業料体系も見直されるべき時に来ていると思っていまして、個人的には応能負担が原則ではないかと思っています。国も自治体も納税者が減って財政に限りがある、しかも所得格差が開いている中で、無償化にだけすればいいのかということ、払える人がどうしてもっと払っていないのかは問われるべきです。払える人に払ってもらって、そこから財源を捻出して奨学金でもいいと思います。機会を均等化することとは、ただ無償化すればいいということではないと思っています。

教育長：この学校では寮費を含め年間 450 万円の学費が必要で、7割が給付型の奨学金を受けているということですが、日本国籍の生徒は何割ですか。

小林氏：3割程度です。

教育長：日本国籍の生徒でも奨学金を受けている生徒はいるのでしょうか。

小林氏：日本人でもいますし、海外の生徒もいます。

倉田委員：私の教育理念として、人を知り、人から学び、自分を知り、自分を高めていくというのが持論なのですが、今お話聞いて先生が貧困教育から自分で教育方針を打ち出されたということで、なるほどと思ってお聞きしていました。グローバル化時代に多様性を活かす力として、環境設定は重要ということで、幅の広さが非常に重要になってくると思うのですが、公立学校での幅の広さは限界があるところもあります。カリキュラムを一人一人先生に作らせているのか、自分で意識して授業に臨んでいるのか。コミュニケーションをとる時の、言葉の壁を越えるための良い方策があれば教えていただきたいと思いません。

また価値観の共有は大切だと思うのですが、その時のニーズのギャップで御

苦勞なさはあつたのでしょうか。

小林氏：環境づくりについては、よく普通の公立では難しいと言われるのですが、私の子どもは公立の小学校と保育園に行っていて、すごくダイバーシティがあります。軽井沢町に私立はないので、全員公立に行くので、家庭環境、考え方、職業がバラバラで、これは素晴らしいことだと私は思っています。元々特別支援をされていた先生が現在息子の担任で、個性を非常に大事にしてくれます。実は国籍ということではなく、価値観や個性の多様性はどの教室にもあるはずで、私立には、画一的な価値観と社会階層の人を集めた学校もあるので、そういった環境ではダイバーシティは少ないかもしれませんが、公立はダイバーシティがある方だと思います。それをどういかに先生がどう授業をするかが重要だと思います。息子はずっと漢字を書くのが好きではなかったのですが、算数が非常に得意でした。先生はしばらく漢字をやらなくていいと仰ってください、ひたすら算数をやっていました。算数をやっているうちに、ホーキング博士の本を読みたいとなり、読むためにはしょうがないので今漢字を一生懸命やっています。それでいいと思っています。こういう指導をしてくださった先生に非常に感謝しています。こういった個性や考え方の多様性はどこにでもあるのではないかと思います。

授業のカスタマイズについては、国際バカロレアの高校であればどこもそうだと思いますが、生徒全員それぞれ時間割が違います。時間割が非常に複雑で母国語、外国語、理科、数学、社会、芸術の6つの柱の中で科目を選択した上で、2～4のレベル分けがあるので、ほぼ全員にカスタマイズされているという現状です。施設側の対応も大変で、あらゆるサイズの教室が必要なため、200人の学校とは思えないくらい大小様々な教室があるので、コストがかかってくる面はあります。

三点目、言葉の壁については、英語がネイティブの子どもは3割程度のため、過半数がノンネイティブですので、共通言語としての英語でコミュニケーション

ンをしています。他の国は英語教育が日本よりは進んでいるので、日本人で公立小中から来た子たちは当初非常に苦労しているが、全寮制なので英語の上達は早いとは思いますが。

最後に、ニーズに関する価値観の違いについて。例えば男子寮がとても汚いという場合、汚い状況を何とかしたいというのはみんな同じだとして、解決の中で価値観がぶつかり合います。日本人の生徒がお掃除当番をやらうと言い出して、当番表をチェックしてみんなでやっているけれどきれいにならない。なぜかというときれいにするというのは当番の主観によるということがわかり、「シンクに汚い皿が残っていないようにする」、「ゴミを分別して捨てる」など具体的にこの項目をやったら掃除したということにしましょうとしたところうまくいきました。ニーズとしてはぼんやりと同じようなものを持っているが、具体的にどう解決していくかというときに主観のぶつかり合いや価値観の相違でうまくいかないことが続出しますが、それこそが実社会です。こういうことを重ねていくうちに、価値観のズレをどう修正していくかを学び取っていくのではないかと思います。

倉田委員：国際バカロレアの研修を受けたので、どうだったかなと思いました。

小野村委員：私は元々公立中学校で16年間教師をやっていて39歳で辞めまして、現在は不登校の子どもたちの支援をしています。今日のお話をお聞きして非常に感服しました。マスコミに取り上げられ始めた頃から注目していました。

つくば市の文集を持ってきたのですが、教育長が巻頭で「多様な作品が並んでいるが、創作文が2点、社会評論が1点であり、少しさみしい」と書かれています。今の日本の学校教育を象徴しているところだと思って見ていました。私自身も学校で教えていて、子どもたちがニュースを知らない、ウェブを使ってニュースを知っていても偏ったニュースだけを知っているというケースが多いと感じています。

私は昭和天皇が亡くなった際に「昭和天皇と戦争犯罪」というテーマで授業をやりました。もちろん私は中立的な立場を保つようにしたのですが、世界の様々な意見を紹介しながらやると子どもたちはしっかり意見を言うし、意見を言いたい子はしっかり勉強します。今日のお話を聞いて、そういったことに体制を整えてやっつけていってやるといふことに強く心を打たれました。

失敗体験については、今私も「失敗してもいい」ということを分かってもらうことに苦労しています。できないことをできるようにしていこう、間違えて当たり前と言っても今の子どもたちにはなかなか伝わらない。これが日本の教育の課題だと思います。

さて、感想はその辺にして質問を1つ、私が大事だと思っているのは、例えば、田んぼに立って、ここの土で育ったお米を食べて生きているのだというような、自身の立ち位置を知ること。グローバル社会といっても、ステータス(立ち位置)を知った上で世界に出ていくことが大切だと思うのですが、小林さんの学校の子どもの立ち位置はどのようになるのでしょうか。

小林氏：社会的なタブーや失敗に挑む環境に学校がなくなりつつある現状について、一つお話したいと思います。実は教育現場だけの責任ではない気がしています。モンスターペアレンツの数がとても多い。社会が教育現場に押しつけている。子どもがリスクをとって大失敗したら親が飛んでくるという状況では、学校現場はできないと思います。私たちはたまたま私学なので、保護者の皆様に学校の趣旨に賛同する文書へ御署名いただいております、趣旨を御理解くださる方だけに入っていただくことができます。公立はこれができないことが苦しい悩みの原点な気がしています。私は地元の中学校の評議員もやらせていただいております、地元の小中の先生ともよくお話するのですが、教育現場としてはもっとユニークな教育もしたいと思っています。そういうときに、PTAはモンスターペアレンツを御してほしいのですが、そうはなっていない。教育現場の挑戦を、応援できるPTAであってほしいと思います。

また、アイデンティティについてですが、ダイバーシティの中で見えてくると思っています。海外に行って「あなたはどの国から来たの？ どういうポリシーを持っているの？ どのようなイデオロギーなの？」と聞かれて初めて日本の歴史を紐解きました。学校の歴史教育が必要ないというわけではなく大事なのですが、その意味が問われる時は、というのはダイバーシティの中に放り込まれた時に、アイデンティティが芽生えてくるといえると思います。中で中のことを賞賛することも大事ですが、今はテクノロジーが発展しているので、外から自分たちを見ることもやりやすい時代になってきていると思います。ダイバーシティを通して外から見るアイデンティティは、強くなる傾向はあると思います。私たちの学校では、アイデンティティについて考えざるを得ない環境に置かれた結果、個々人のアイデンティティが確立していると思います。

柳瀬委員：私も教師をしていて、その後、筑波山麓で福祉の共同体を始めました。グループホームをしまして、親元を離れてグループホームに入ると自立性も高まり、自分で考えようとするので、全寮制ということで学びの力は大きいのではないかと思います。高等教育に近いインターディシプリナリーと実践で、非常に高度なことをされていると敬服します。財政的に奨学金や一条校としての私学助成金で運営できるのかもしれませんが、ファンドや寄付の仕組みや理事会のガバナンス等はどうしているのでしょうか。

小林氏：たくさんの皆様のおかげで、寄付と学校債を通じてこれまでに50億円を超える資金を調達させていただくことができました。年間のオペレーションが約10億円のうち、私学助成は1割で、3～4億円の寄付が毎年集まっています。寄付の主な財源はふるさと納税です。軽井沢町に95%が学校の奨学金指定でふるさと納税をしていただけるように依頼したところ、条例化していただきました。初年度は7,000万円でしたが、現在は3～4億円学校の奨学金に使ってほしいということで全国から集まっています。私を含め理事・評議員は全員無給で理事会参加時の交通費も自腹ですが、校長以下教職員は国際的に

見ても恥ずかしくない水準の給与を払っています。

柳瀬委員：恐れ入りました。

鈴木委員：お話を聞いていて、たくさん議論した高校生活を思い出してわくわくし、一方で、我が子の置かれた実際の学校教育のことなどを考えると打ちのめされるような感じもしました。私のキーワードとして「失敗」があります。私自身も親の期待に応えていく生き方をしてきたので、生きづらさを感じ、自己実現を目指す中でたくさんの失敗をしてきました。こどもたちに「任せ」、自由にさせて、たくさんの失敗を経験させることが大切です。学校に話をしに行くと、先生たちは子どもをもっと自由にしてあげたいが、他の保護者が「こどもが失敗するのでやめてくれ」という要請があると聞きました。学校をもっと自由にさせてあげるとするのは社会の責任なのかなと思いました。また、貧困対策というと、ボランティアで教えてあげるのであればクオリティが低いものでもいいというところがまだまだあると思います。機会の均等として、補助によってクオリティの高いものを貧困層の方にも提供することは大事だと思っています。

小林氏：先生の人事考課が重要な論点だと思います。第7次教育再生実行会議のメンバーを拝命した際に、教育の質の議論をする前に、先生の働き方改革と養成、研修、評価の改革をした方がよいのではないかと申し上げたことがあります。先生方の働く環境を整え、どういう資質をもつ先生が評価されるべきなのかに立ち戻らなければいけない。機会均等については、補助と完全な応能負担の間にもいくつかあると思います。教育界はビジネス思考が不足しています。例えば、ドバイとロンドンに拠点を置く教育の企業がありまして、そこが国際的な教育を年間80万円のできるの、教師を欧米人が1割にして、9割がインド人とフィリピン人にするので、人件費を大幅に下げているからです。英語のアクセントは多様にはなりますが、教育の質が下がるかというところではない。いろいろな方法で機会の均等を実現するので、無償化や奨学金

以外にも、第3、第4の道が工夫によって存在しうると思います。

関連して一つ前の柳瀬さんの御質問に戻りたいのですが、50億円が天から降ってきたような話をしてしまったのですが、そういうわけではなくとても苦勞しました。準備期間の5年間に4,500人に会っていました。メディア、自治体を除いても3,000人には御寄付のお願いに伺ったと思います。そのうちファウンダー(大口出資者)になってくださったのは100人で、2,500~2,600回はNOといわれています。妥協すればもっと安くできたかもしれないが、教育は妥協せずにやっていくからインパクトがあると思うので、妥協はしませんでした。理想の教育を実現するための術を工夫する方が大切だと思います。

柳瀬委員：昨今はりんさんのように歩いて、説明して、情熱を伝えるということが足りないように思います。2,000枚のチラシをまいて、1割反応があればすごい反応で、そういうことをやりつつ感性に訴えなければ、こういう学校は実現しないと思いました。

小林氏：関連して、どんな変革でも急には起こらないので、アーリースモールサクセス(初期段階で小さくてもいいから成功例を出す)が大切です。これはベンチャー業界では鉄則らしいのですが、私も当初は存じ上げず2008年、2009年と何十億も出してくれる人はいないかとかけずりまわって一切集まらなかった。起業家の友人から君にとってのアーリースモールサクセスは何かと問われて始めたのが、2010年のサマースクールでした。やってみせることはすごく大事で、概念やアイディアはたくさんあり、語るのは簡単ですが、実際に教師陣を集め、世界中から生徒を集めてやってみること、理想の教育を一コマ一コマの形におとしこむこととは別次元です。実際にやってみて初めて、2週間で生徒が激変していくことで、この学校はすごいことになりそうだという実感がたくさんの方に芽生えて、2年目からはサマースクールの取材が増えました。概念と現場とのつなぎのスペシャリストの必要性が重要だと思います。

柳瀬委員：障害者アートをずっとやっているが、障害者のアーティストを呼ん

で共同生活をしながらアート活動をしています。そこで受けた作品が生まれてくる感覚は、アーティストに触れないで作品を展示しただけでは分からなかったと思う。

小林氏：そうですね。公立ではやはりそれでも新しいことを全校で試すのは難しいかも知れません。しかし、アーリースモールサクセスの理論で行けば、例えば希望参加で少人数でもリスクをとる何かをしたときに子どもがどれだけ変わるかが見られれば、保護者の見方も変わると思います。

柳瀬委員：できることをちゃんとやっていかなければいけませんね。

小野村委員：教育大綱を考えていく時にも私たちが同じ学校を作ろうという話ではなく、「つくばの学校に多様性を持たせる」というのは重要なキーワードになってくると思います。教育委員会でも学校裁量の話をしていましたが、今までの学校には裁量権が非常に小さかった。英語の授業で私が裁量してやるとすれば週2時間程度にしたい。2時間でもしっかりやればぜったい英語力はつくと思っています。学校にもっと裁量性を持たせていけばいい。公立学校の中でも自分の考えに合っている方に来てもらうようにすればいいと思います。

小林氏：「現場に裁量を」というのは、重要なキーワードだと思います。クリエイティブな子はクリエイティブな人にしか育てられないと思います。クリエイティブな人が来たい職場環境かという、今の学校はどれだけクリエイティビティを発揮する余地があるかは疑問です。クリエイティブな人が来たいと思える学校になれば、クリエイティブな人が来ると思います。今の日本はOECD諸国の中で、小中の先生方の社会的に見た地位が極めて低い国の一つとなっていますが、それは給料の問題というよりは長時間労働で裁量権がなくて、教育と関係ない膨大な業務がある。それを効率化して、先生に裁量権があってクリエイティビティを発揮することができれば変わると思います。人事権と予算権がない社長は会社の舵取りが非常に難しいが、校長は決定的な人事権も予算権もあるわけでないという状況下で、校長とは何なのか、学校のマネジメントは何

なのかという点について仕組みを変えられるのであれば、長く見て大きなインパクトが得られる点だと思います。つくば市のような大きな自治体だからこそできることもある。学校毎の個性を出せて、親御さんが選んで来られるようになると、多様な学校運営ができる可能性はある素性だと思います。

市長：ありがとうございました。日本中の教育に問題意識を持っている人たちが、思っていることはたくさんあっても誰もできなかったことをりんさんが実践しているということに感服していると思います。これまで様々な努力をされてきているということに心からの敬意を払いたいです。

教育大綱を作っていく中で、「公教育とは何か」を常に考えています。学校の先生をどういう存在としていて、先生の役割はどうなっているかをお聞きしたいと思います。お子さんの公立の先生が素晴らしいというお話がありましたが、先生によって当たり外れがあることは望ましい姿ではなく、人事考課にもつながると思うのですが、どういう評価をしていて、公教育で引用できるかというヒントがあればお聞かせください。

小林氏：学校のクオリティは、先生が決めていると言っていいくらい重要です。私たちの場合は特に全寮制ですので、教室での学びは一部。ティーチングが3割、ボーディング（寮生活の中で倫理観などを培う）が3割、コーチング（クラブ活動やプロジェクトの中でチームワークなどを培う）が3割と言われています。国際バカロレアの教え方が上手いだけでは採用しません。生徒の学びや失敗を支えてあげられる人、議論をファシリテートできる人に来てほしいと思っています。

人事評価については、公立学校にどのくらいヒントになるかは分かりませんが、全員就任当初の給与はフラットです。経験値が多ければ賢く、教えるのが上手いというわけでは必ずしもないと思うし、フレッシュで既成概念に制約されない方がいいこともあるはずなので、先生を年次や学位で区別していない。全員原則2年契約なので、学校方針に合わない先生は契約更新しないことがま

様式第1号

れにあります。100倍の倍率の中から先生を探してきて交代しています。公立学校には難しいかも知れないが、年次が優劣を決めるものではないという明確な哲学が、人事考課に反映されています。先生の更新についても決して点数ではなく、プロジェクトの中でどのくらい新しいことをしてくれるか、新しいアイデアにオープンか、学校の改善についてきて一緒に学校を作っていけるかというところになります。

市長：ありがとうございます。我々もそこからいろいろな学びを得ていかなければいけないので、公立だからできないということは絶対言わないようにしようと思っています。逆にりんさんが軽井沢の教育長だとしたら、どのような教育を展開していきますか。

小林氏：難しい御質問ですね。住民が何を求めているのかにもよるとは思いますが、軽井沢は車社会のため親がかなり送り迎えをするので、越境がしやすいとすると、3校それぞれ特色がある教育をしたいと思います。現在すでに、中学校で体育など5教科以外のところから英語ネイティブの先生に変えてもらっています。5教科をいきなり英語となると拒否反応が出るかと思いますが、特色を持たせていくことができるといい。2020年には私学の小中一貫校ができます。PTAの中で問題意識を持っていろいろ活動されていたけれど、リスク管理や制約の中でやりたいことができず、親御さんのお一人が私学をつくります。教育委員会がすごくサポートしています。人口2万人の街で私学ができるのはどうなのかと賛否両論ありましたが、いろいろな学校の中で特色のある教育ができるといいと思います。

市長：ありがとうございました。我々も挑戦する心を持って取り組んでいきたいと思いますので、これからもぜひいろいろな力を貸してください。

事務局：本日は長時間に渡り御協議いただき、ありがとうございました。次回は10月31日を予定しています。議題としては、小中一貫教育評価懇談会の成

様式第1号

果報告書について御協議いただく予定となっております。これをもちまして平成30年度第5回つくば市総合教育会議を終了させていただきいただきたいと思いを。ありがとうございました。

以上。

平成30年度第5回つくば市総合教育会議次第

日時：平成30年9月27日（木）11時00分～

場所：202、203 会議室

1 開会

2 市長挨拶

3 講演 《11時00分～11時30分》

講師：小林 りん 氏

（インターナショナルスクール・オブ・アジア軽井沢 代表理事）

講演題目：次世代を担う若者たちのために

4 講演を受けてのディスカッション 《11時30分～12時30分》

5 閉会

事務局：総務部総務課

：教育局教育総務課